

今結核対策がおもしろい:世界への日本の貢献

4月24日(木) 17:10~19:30, 日本教育会館(千代田区)一ツ橋ホールにおいて, 200名近い参加を得てシンポジウムが開かれた。今回は, 一般も参加できるという企画で病学会としては初めての試みだった。

最初に座長のWHO本部結核対策部の小野崎郁史先生から, 「これから話すスピーカーはすべて40代です。若いと取るか, おじさんと取るかは聞き手にゆだねますが, 色々な国で結核やエイズ, 母子保健の世界で活動されてきた方々の話を聞いてください」と学生と思われる参加者に呼びかけた。

シンポジストからの発言

一人目は, カンボジア結核対策をされた結核予防会の杉山達朗先生で, 暗い歴史から復興を迎えたカンボジアにおいて, 1994年からJICAの長期支援が始まり, 結核対策が国全体に広がっていった経緯をお話された。患者発見率は, ヘルスセンターでDOTSを行うことによって増えたが, さらにその裾野を広げるためにコミュニティに入る活動を紹介した。そのためにお金だけではなく, 病院などのインフラや人材開発など, それぞれを得意とするNGO, WHO, その他の専門集団と提携して進める現状も説明した。

二人目は, 結核実態調査をされた結核研究所の山田紀男先生が, 結核の実態調査の意義や結核対策の方向性について解説した。ミャンマーで現場に出かけ調査した結果, 約10年前と比べて, ヤンゴンでの調査(2006年)では患者のピークが40代から30代に移行しており, 現在進行形の病気と理解することができた。また, 調査を通して多くの人(チーム)で活動し, コミュニティに行き現場の人と話しながら問題点を掘り起こし, 住民参加で行った健診が, 住民へのサービスになっているところが, おもしろさを感じるとまとめられた。

三人目は, SHARE国際協力市民の会の澤田貴志氏。今まで世界5カ国の支援活動をNGOとして続け, 地域のボランティアとの活動を報告された。日本における結核対策として治療に結びつきにくい外国人の対策を実施した事例をあげた。治療を完了するために健康相談会を実施し, 言葉が理解できない方にDOTSを行う方策を検討された。支援員として通訳の方をDOTS事業に盛り込むなど, 東京都や結核予防会と協力して実施して治療成績を上げた。

四人目は様々な国で結核のみならず母子保健, 保健政策など幅広いご経験をお持ちのWHOパキスタンの江上由里子先生が, バングラデシュでの母子保健対策の経験をお話された。8カ月の服薬確認記録の考え方を反映して, 妊産婦健診の記録を中期的かつ継続的なフォローアップと位置づけ, 機能させられた経緯がお話された。現在健診数が増え, それによって必要になる薬や医療体制の整備, 現場のニーズにあった研修のフィードバックを課題とし, 今の日本に求められているのは, 世界への協力体制と人材の貢献と大学や研究所, そして民間との連携が重要と話した。

五人目は, ザンビアJICA専門家をされていた座間

智子先生。横浜市で6年間の保健師活動後, 結核研究所で勉強され, ソロモン諸島で対策を実践後, ザンビアに94年から2006年までTB/HIVの専門家として活動された。ザンビアでは, すべての結核患者にHIVのテストをする国家プロジェクトが始まり, 効果を出しているが, 現場では, 医療関係者の感染への不安, 検査を受けることへの抵抗, 治療したくても生活のために望むようにできないという本音も紹介した。お金も必要なものもないという状況の中で, 現地の人と協議して一緒にやっていくことが醍醐味と語られた。

最後には, 座長でもあるWHO東地中海地域事務所の清田明宏先生が, WHOでどんな仕事をしているかわかりやすく説明した。東地中海地域には22カ国あり, その国の問題点を上げ, 改善のための計画を策定, 支援するという仕事と概略を説明した。結核対策のおもしろさは, 「もの」が動き, 「人」が動き, 「金」が動くこと。目に見えて治療を受ける人が増え, そのために色々な人が連携しながら, GDFなど500億円のお金が22カ国で使われているということは, 非常に面白い。「日本は, 経験もネットワークも資金も対策をする受け皿まで整っていて未来は明るい! 結核より早く感染する熱意が必要」と聴衆に訴えた。



壇上のシンポジスト

会場からの発言

スピーカーが壇上にあがって, 会場からの質疑に答えられた。海外で母子保健の国際協力をしたと考えている看護学生からは, 今までの活動の障害になったことをきかせてほしいという質問が出た。文化の違いや良かれと思ったことが相手を傷つけたり, 時間の感覚がちがっていてイライラしたりという様々なエピソードを伺った。また英語力の問題についても, 簡潔に話す, 内容があるかどうか, 相手の話を聞き自分の主張を伝えて納得させることが必要とされ, 身振り手振り, ホワイトボードに書いて説明するなど, 言葉だけではないコミュニケーション能力も問われると話した。

最後に, 石川結核研究所長から国際協力に興味がある方には, ぜひ「人間力」を養ってほしいと話された。日本で学ぶことには限界があり, 現地に行きまずコミュニティに関わって現場を知り, 公的機関にも掛け合いながら, 理解しあってはじめて国際協力がなせると説明した。所長自身が「世界平和」の実現という理念で苦しくてもやり続けている。若い皆さんにもぜひ今日のシンポジウムを聴いて, 国際協力, また結核対策の扉をたたいてほしいとまとめた。

(文責:編集部)